

学位論文題名

大伴家持研究－作品とその方法－

学位論文内容の要旨

本論文は、万葉歌人大伴家持の在京期及び越中期の作品においてどのような表現の方法が採られているかを分析し、家持の作歌の軌跡を把握することを通じて、歌人としての再評価をめざしたものである。廣川氏は家持の作歌の主要な方法を、ある主題の「系譜」に連なる作品の表現を、系譜の継承という明確な意図のもとに学び取って行く「うたまなび」の営為として、その深化と広がり、という点を分析の中心において考察している。

I 「在京期の作品」では、越中赴任以前の作品を考察する。

まず第一章では大伴家持のいわゆる「習作期」の歌を扱う。はじめに、家持の「初月の歌」と大伴坂上郎女の歌との表現の関わりを考察して坂上郎女のもとで漢籍の素養にもとづいた表現を学び取ろうとする家持の姿勢を見出し、ついで、坂上大嬢への贈歌の分析を通して人麻呂歌集に学んだ作歌の様相を確認する。また紀女郎との贈答歌から、貴族的知識層に属する歌人たちの交流の場を見出し、家持が漢籍の素養を基盤としてそうしたサロンに臨んでいたことを確認する。次に第二章では「悲傷亡妾歌」を考察の対象とする。従来「模倣」として片付けられて来た先行作品からの表現摂取のあり方を、その表現が歌群全体にはたす機能の点から捉えなおし、そこに家持の方法的な摂取のありようを見出す。まず、弟書持の歌の存在に注目し、当該作品が兄弟を含む文芸サークルともいふべき「場」に供されたものであることを指摘する。この作品には整然とした構成が見出されるが、こうした構成はそれを理解しうる第三者、すなわち上記の文芸サークルのような場が想定されてこそ意味があり、先行表現の摂取は人麻呂・憶良・旅人と継承されて来た亡妻挽歌の系譜に自らを位置づけようとする意図の現われであり、そこには、確たる目的意識に裏付けられた「うたまなび」の様相が見られるとする。第三章では「安積皇子挽歌」を考察の対象とする。その制作は皇子挽歌の系譜を継承し天平の世に再来させることを意味するもので、遺族の心情に即して皇子への悲哀を述べる第一挽歌が齋会という公的な「場」で公表されたものであるのに対し、第二挽歌は皇子を取り囲む青年貴族グループの、私的ではあっても集団的な追悼の「場」において歌われたものであり、彼らの共有する心情に適合させる形でとり残された者の悲哀を歌いあげた作品に仕上がっているとし、家持は、かく皇子挽歌を再来させたことにより、聖武朝宮廷社会に歌人として本格的に承認されたと結論づける。最後に第四章では聖武天皇東国行幸の折の従駕歌群を考察の対象とする。この歌群には「周縁を経めぐる王権」というモチーフが大きな枠組みとしてあり、個々の歌は「古へ」を織り込むかたちで作られ、全体として現在の王権の拠ってきたところ、すなわち天武皇統の来歴を、遠近図法を用いて辿り直すさまが見出される、と述べる。

IIは越中在任期の作品を考察する。

第一章では、まず越中赴任直後の宴席歌群を考察し、そこに一座の官人たちの共通感情が綴られることで越中国府の結束が表わされ、越中への讚美の視線を共有することでそれがいっそう強められているとする。次に二つの「賦」(長歌)作品とそれぞれに対する属

僚大伴池主の「敬和の賦」とを考察の対象として、国守家持を中心とした越中国府の官人社会のあるべき姿や、内なる越中国府の官人社会と外なる世界との対比によって官人集団の結束を描いていることを明らかにする。また巻十九巻頭歌群とその直後の「上巳」の宴歌との関連を明らかにし、それらが越中国府官人の共通感懐に依拠したものであることを指摘する。第二章では、「悲緒を申ふる歌」においては「死」を主題として作品化するためにいかなる方法が採られたかを、また「處女墓に追同する歌」では、反歌の時間が長歌がなう時間のすきまを埋めることにより、長反歌全体によって「古へ」から現在までの時間の流れを描き出し、「追同」の対象である先行の福麻呂歌・虫麻呂歌には見られない娘の美しさ、心情、死に行くさま等に焦点をあてて伝説世界を十全に描き出し、先行歌では語られていない空所を描くという手法が見出せる、として、ここに、在京期には未だ十分に成し得なかった長歌の叙事の方法を確立したことを明らかにする。また第三章では、王権讃美の歌においてどのような方法が採られているかを見出し、先行作品を方法的に学び取ることを通して成長してきた家持の歌業の達成を見定める。まず、「陸奥国出金詔書を賀く歌」について、聖武天皇への讃美の歌であると推定し、長歌前半部では、聖武天皇の、服従させるべきものは服従させ慈しむべきは慈しむという理想的な統治の姿が描かれ、ついで後半部ではこれに応じて、服従する側もさらなる「言立て」をして付き従うことが述べられ、反歌では、聖武の御代がスメロキの御代として讃美され、なおかつスメロキの系譜と常に共にあった「我れ」の系譜が作品上に示される、とする。次に「吉野行幸儲作歌」では、聖武が吉野離宮に臨幸する姿と、奉仕し続ける「もののふの八十伴の男（氏人）」の姿とを対照するかたちで綿密に描き出し、反歌で両者が視線を共有すると歌うことによって、両者の結びつくさま（君臣和楽）が明瞭に表わされ、皇統の来歴が辿りなおされ、吉野離宮がその歴史において捉えられていると結論づける。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである。（４００字詰原稿用紙換算約８６８枚）

序	1
I 在京期の作品	4
第一章 初期作品	5
第二章 悲傷亡妾歌	23
第三章 安積皇子挽歌	54
第四章 聖武天皇東国行幸従駕歌論	80
II 越中期の作品	97
第一章 越中歌壇について	98
第二章 長歌作品の方法	144
第三章 王権讃美の方法	170
結	214
所収論文目録	217

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 伊 東 倫 厚
副 査 教 授 南 部 昇
副 査 助 教 授 冨 田 康 之

学位論文題名

大伴家持研究－作品とその方法－

審査委員会は、本論文が提出されて以後、たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また口述試験を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、廣川晶輝氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して、文学研究科委員会に報告した。研究科委員会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

本論文は、万葉歌人大伴家持の作歌の主要な方法を、ある主題の「系譜」に連なる作品の表現を、系譜の継承という明確な意図のもとに学び取って行く「うたまなび」というところに見出し、それを支えた「場」の究明、また「うたまなび」の深化と広がり、という点を分析の中心において考察したものである。

I「在京期の作品」では、越中赴任以前の諸作品の考察を通じて、「うたまなび」の実態と、「場」の性格とを分析する。「初期」の概念になお曖昧さが残る、「うたまなび」と「場」との関りについての説明が不十分である、等の問題はあるが、取り扱った各作品の分析や定位はほぼ妥当で、個別の作品論としても十分に評価し得るものと思われる。中でも「聖武天皇東国行幸従駕歌」論は従来に無い斬新な視点からの考察で、表現分析も周到であり、学界に寄与する点が大きいと判断される。

II「越中期の作品」では、主として長歌作品を分析して「うたまなび」の深化と広がりを究明する。個別の作品論としてもI以上に達成の度が高く、学界を裨益する論が多い。漢籍の利用のしかたや「時間」論的な分析に多少不十分な面を残すものの、作品分析と体系的な位置づけとがかみ合って、越中期の家持を論ずる新しい方向を見出したといえる。

本論文に於いて瑕瑾を求めるとすれば、越中から帰任して以後の家持主要作品に言及していない点であろう。家持の歌人としての全体像は、それを抜きにしては明らかにし得ないからである。しかしながら、分析の基本的視点、分析の周到さ等、本論文で示した同氏の力量は、今後この点に関しても検討をつづけて行くに十分なものであることをうかがわせる。

この論文は全体として、大伴家持研究における現在の学界の水準を超えるものであり、事実その大半は、すでに学会誌等に発表され、研究者の間で一定の評価を得ている。また、この論文での安定した研究の姿勢から見て、廣川氏は今後、家持に限らず広く万葉集研究の全分野において、第一線で活動していくに十分な力量を有していると判断される。